緑と暮らす
【第５回】

都市の緑３表彰 第43回「緑の都市賞」第一生命財団賞

学校法人植草学園 植草学園大学

千葉県千葉市若葉区

「植草共生の森」　キャンパス東側に2万㎡ほどの森が広がっている。森には、イヌシデ林の中にコナラ・クヌギなどが混在するエリア、スギ人工林エリア、竹林エリアなどがある。

千葉市は千葉県の中央部に位置し、中央区、花見川区、稲毛区、若葉区、緑区、美浜区の六つの区で構成されている。若葉区にある植草学園大学は、徳川家康が鷹狩りのために造ったといわれる御成（おなり）街道沿いにあり、市の中心街から車で20分ほどの距離にある。街道の北側は今でもスギ林やヒノキ林、雑木林などが残っているが、南側は高度成長期に造成された住宅地が広がっている。近年、宅地開発がさらに進み、残っていた林が減少傾向にあり、生物多様性の喪失や地域の気温上昇が問題となっていた。

そこで同大学は、２０１２年より大学に隣接する里山放置林の整備を始めた。この森は、「植草共生の森」と名づけられ、10年以上に渡る活動によって里山の景観を取り戻し、今では、学生の学びの場・くつろぎの場に加えて、地域の人びとが緑と触れ合い、その大切さを感じることができる場となっている。

同大学教授の早川雅晴さんは「卒業生の多くは教職につきます。将来、それぞれの学校で次の世代を担う子どもたちへ緑の大切さを伝えられる先生になることを期待しています」と話す。

２０２３年10月、都市化が進んだ地域で緑を守る活動を続けている同大学は公益財団法人都市緑化機構主催の「緑の都市賞」（特別協賛・第一生命財団）の第一生命財団賞を受賞した。

スギの人工林　長年放置されたスギ林の林床は薄暗く、アズマネザサや低木などが生える程度で植生は貧しかったが、手入れしたことでジュウニヒトエやアマドコロなどが生育するようになった。

森にある水辺エリア　温暖化の抑制や地域の子どもたちの自然学習のため、水田や小川、池からなる水辺エリアをつくった。左写真は、池に絶滅危惧種のミナミメダカを放流しているところ。

学生サークル「共生の森人」
月に一度、生き物や植物の生息環境を整えるための森の整備活動を行ったり、さまざまな体験会の手伝いを行ったりしている。写真は、刈った草を落葉溜めまで運ぶ学生たち。

共生の森に咲くキンラン　キンランは、地面まで太陽の光が届く環境を好む。そのためキンランが生育する森林は、よく手入れがされていることをあらわす。「植草共生の森」のキンランは、昨年から 114 本増えて、今年は 329 本が確認できた（開花時期は 4 月から 5 月頃）。

「植草共生の森」の水辺エリアにある棚田での田植え体験　取材に訪れた５月 10 日、田植え体験が行われ、学生のほか、地域で暮らすたくさんの親子が参加した。田んぼでカエルやおたまじゃくしを見つけた子どもたちは、「キャー！」と喜びながら生き物に触れていた。また、はじめて泥に足を踏み入れた子どもが「気持ちわるいー」と付き添いの大人に抱きつく姿も見られた。

稲刈り体験　春に植えた稲が実る秋には、田植えと同じように学生や地域の親子が参加して稲刈り体験を行っている。栽培しているのはもち米で、天日で乾燥させ、冬に餅つき体験も行う。写真は、2023 年に行われた稲刈りのようす。